

川端康成

村上春樹

芥川龍之介

太宰治

夏目漱石

日本近现代 文学作品选读

张海萌 主编

この美しく光る黒眼がちの
大きい眼は踊子のいちばん
美しい持ちものだった二重
瞼の線が言いようなくきれ
いだった。



天津大学出版社
TIANJIN UNIVERSITY PRESS

2012 年教育部人文社会科学研究青年基金项目成果

(编号: 12YJC752040)

日本近现代 文学作品选读

张海萌 主 编



天津大学出版社

TIANJIN UNIVERSITY PRESS

内 容 提 要

本书共精选近现代小说、和歌共 16 篇(部分节选),按照作品出版年代先后排序,以小说为主,涉猎不同时期、不同流派的名家名篇,从而比较全面地反映日本近现代文学特色。每篇作品附有作品梗概、注释、作者介绍、作品鉴赏等,帮助读者更好地了解作家的艺术风格,读懂作品主题思想。读者可通过具体作品赏析的实践,全面掌握文学作品解读的方法,为进行更为深入的文学研究打好基础。

图书在版编目(CIP)数据

日本近现代文学作品选读 / 张海萌主编. -- 天津 :
天津大学出版社, 2015.7

ISBN 978-7-5618-5372-6

I. ①日… II. ①张… III. ①日本文学—作品综合集—近现代 IV. ①I313.15

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2015)第 172349 号

出版发行 天津大学出版社
地 址 天津市卫津路 92 号天津大学内(邮编: 300072)
电 话 发行部: 022-27403647
网 址 publish.tju.edu.cn
印 刷 北京京华虎彩印刷有限公司
经 销 全国各地新华书店
开 本 185mm×260mm
印 张 17.75
字 数 576 千
版 次 2015 年 8 月第 1 版
印 次 2015 年 8 月第 1 次
定 价 38.00 元

凡购本书,如有缺页、倒页、脱页等质量问题,请向我社发行部联系调换

版权所有 侵权必究

前 言

具备一定日语基础的学习者,可通过阅读经典的日本近现代文学作品来巩固语言基础,提高文学阅读、鉴赏能力;并根据文学作品所提供的特定背景和语言环境来理解词汇含义,把握语感变化。笔者在多年教学实践的基础上,编写了这本《日本近现代文学作品选读》教材,旨在引导学生了解日本近现代文学发展的进程、特点,掌握解读日本文学作品的基本技巧和方法,以把握日本人的审美意识、价值取向、思想活动规律。

本书共精选近现代小说、和歌共 16 篇(部分节选),按照作品出版年代先后排序,以小说为主,涉猎不同时期、不同流派的名家名篇,从而比较全面地反映了日本近现代文学的特色。部分作品附有作品梗概、注释、作者介绍、作品鉴赏等,以帮助读者更好地了解作家的艺术风格,读懂作品主题思想。在具体作品赏析的实践的过程中,读者能逐渐掌握解读文学作品的方法,为进行更深入的文学研究打好基础。

本书可用于高等学校日语专业日本文学选读课以及硕士研究生的日本文学课教学。鉴于文学选读相关课程通常设置于日语专业本科三、四年级,或为日语硕士研究生所用,学生已具备一定语言基础,本书内容均用日语撰写。

由于编者水平所限,书中难免存在纰漏及不当之处,敬请读者朋友批评指正。

编 者

2015 年 7 月

目 录

第一課

浮雲 二葉亭四迷 // 1

第二課

白百合 与謝野晶子 // 22

第三課

我輩は猫である 夏目漱石 // 26

第四課

破戒 島崎藤村 // 43

第五課

田舎教師 田山花袋 // 58

第六課

山椒大夫 森鷗外 // 78

第七課

鼻 芥川龍之介 // 101

第八課

城の崎にて 志賀直哉 // 110

第九課

或る女 有島武郎 // 117

第十課

伊豆の踊子 川端康成 // 143

第十一課

蟹工船 小林多喜二 // 165

第十二課

風の又三郎 宮沢賢治 // 184

第十三課

風立ちぬ 堀辰雄 // 202

第十四課

走れメロス 太宰治 // 220

第十五課

ノルウェーの森 村上春樹 // 233

第十六課

キッチン 吉本バナナ // 254

参考文献 // 277

第一課 / 浮雲

二葉亭四迷

あらすじ：

主人公内海文三は融通の利かない男である。とくに何かをしくじったわけでもないが、役所を免職になってしまい、プライドの高さゆえに上司に頼み込んで復職願いを出すことができずに苦悶する。だが一方で要領のいい本田昇は出世し、一時は文三に気があった従妹のお勢の心は本田の方を向いていくようである。お勢の母親のお政からも愛想を尽かされる中、お勢の心変わりが信じられない文三は、本田やお勢について自分勝手に様々な思いを巡らしながらも、結局何もできないままである。

ふうがわり 第三回 余程風 変な恋の初峯入（下）

今年の仲の夏、或一夜、文三^[1]が散歩より帰って見れば、叔母のお政は夕暮より所用あって出たまま未だ帰宅せず、下女のお鍋も入湯にでも参ったものか、これも留守、唯お勢の子舎に而已光明が射している。文三初は何心なく二階のはしごだんを二段三段登ったが、不図^[2]立止まり、何か切りに考えながら、一段降りてまた立止まり、また考えてまた降りる……俄かに気を取直して、将に再び二階へ登らんとする時、忽ちお勢の子舎の中に声がして、
「誰方」
トいう。
「私」
ト返答をして文三は肩を縮める。

「オヤ誰方かと思つたら文さん……淋しみしくツてならないから些ちつとお嘸はなしにいらっしゃいな」

「エ多謝ありがとう、だがもう些ちつと後のちにしましょう」

「何か御用が有るの」

「イヤ何も用はないが……」

「それじゃア宜いいじゃア有りませんか、ネーいらっしゃいヨ」

文三は些すこし躊躇ためらつて梯子段を降果てお勢の子舎の入口まで参りは参つたが、中へとは立入らず、唯ただ鶺鴒たたずん立たでいる。

「お這入はいんなさいな」

「エ、エー……」

ト言つたまま文三は尚お鶺鴒立な たたずんでモジモジしている、何か這入りたくもあり這入りたくもなしといった様な容ようす子。

「何故貴君、今夜に限つてそう遠慮なさるの」

「デモ貴嬢あなたお一人つきりじゃア……なんだか……」

「オヤマア貴君にも似合わない……アノ何時か、気が弱くツちゃア主義の実行は到底覚束ないと仰おつしヤつたのは何人だツけ」

ト螻の首を斜しんに傾ななめしげて嬌然か片頬えんぜんに含んだお勢の微笑かたほに釣つられて、文三は部屋へ這入り込み坐まに着きながら、

「そう言われちゃア一言もないが、しかし……」

「些とお遣いなさいまし」

トお勢は団扇うちわを取とり出して文三に勧め、

「しかしどうしましたと」

「エ、ナニサ影口がどうも五月蠅うるさいい^[3]ツて」

「それはネ、どうせ些とは何とか言いますのサ。また何とか言つたツて宜じゃア有りませんか、若しお相互も たがいに潔白なら。どうせ貴君、二千年來の習慣を破るんですものヲ、多少かんくの艱苦のがは免あれツこは有りませんワ」

「トハ思つているようなものの、まさか影口が耳に入ると厭いやなものサ」

「それはそうですヨネー。この間もネ貴君、鍋おかが生意気に可笑おしな事を言つて私あんなにからかうのですよ。それからネ私が余あんなり五月蠅うるさいなツたから、到底解るまいと

はおもいましたけれども、^{こころみ}「試」に男女交際論を説いて見たのですヨ。そうしたらネ、
 アノなんですって、私の言葉には漢語が雑ざるから、^ま全然^{まるつきり}何を言ったのだから解
 りませんで……^{ほんと}真個に教育のないという者は仕様のないもんですネー」

「アハハハ^{そいつ}其奴は大笑いだ……しかし可笑しく思っているのは鍋ばかりじ
 やア有りますまい、^{きつ おつか}必と母親さんも……」

「母ですか、母はどうせ下等の人物ですから始終可笑しな事を言っちゃアからか
 いますのサ。それでもネ、そのたんびに私が^{はずか}辱しめ辱しめ^し為い為いしたら、あ
 れでも些とは^は耻じたと見えてネ、この頃じゃアそんなに言わなくなりましたよ」

「へーからかう、どんな事を仰しやッて」

「アノーなんですって、そんなに親しくする位なら^{むし}寧ろ貴君と……（すこし
 もじもじして言かねて）結婚してしまえッて……」

ト聞くと等しく文三は^{ぎよつ}駭然としてお勢の顔を目守る。されど此方は平気の
^{てい}躰で

「ですがネ、教育のない者ばかりを責める訳にもいけませんヨネー。私の^{ほうゆう}朋友
 なんぞは、教育の有ると言う程有りゃアしませんガネ、それでもマア普通の教育
^うは享けているんですよ、それでいて貴君、西洋主義の解るものは、二十五人の内
^{たったよつたり}に^{よつたり}僅四人しかないの。その四人もネ、塾にいるうちだけで、^{ほか}外へ出て
 からはネ、口程にもなく両親に^い圧制せられて、みんなお嫁に^{むこ}往ったりお婿を取ッ
 たりしてしまいましたの。だから今までこんな事を言ッてるものは私ばッかりだ
 とおもうと、^{こころほそく}何だか心細ッて心細ッてなりません。でしたがネ、この頃は
 貴君という親友が出来たから、アノー大変気丈夫になりましたわ」

文三はチョイと一礼して

「お世辞にも^{うれ}嬉しい」

「アラお世辞じゃア有りませんよ、^{ほんとう}真実ですよ」

「真実なら尚お嬉しいが、しかし私にゃア^{あなた}貴嬢と親友の交際は到底出来ない」

「オヤ何故ですエ、何故親友の交際が出来ませんエ」

「何故といえバ、私には貴嬢が解からず、また貴嬢には私が解からないから、
 どうも親友の交際は……」

「そうですか、それでも私には貴君はよく解ッている積りですよ。貴君の学
 識が有ッて、品行が方正で、親に孝行で……」

「だから貴嬢には私が解らないというのです。貴嬢は私を親に孝行だと仰しゃるけれども、孝行じゃア有りません。私には……親より……大切な者があります……」

ト吃^{どもり}ながら言^{さしうつむ}って文三は差^{なが}俯^{なが}向^{なが}いてしまう。お勢は不思議そうに文三の容子を眺^{なが}めながら

「親より大切な者……親より……大切な……者……親より大切な者は私にも有りますワ」

文三はうな垂^{くび}れた頸^{くび}を振揚^{くび}げて

「エ、貴嬢にも有りますと」

「ハア有りますワ」

「誰……誰れが」

「人じゃアないの、アノ真理」

「真理」

ト文三は慄^{ぶるぶる}然^[4]と胴^{どう}震^{ぶるい}をして唇^{くちびる}を喰^くいしめたまま暫^{しば}らく
だんまり^{だんまり} やや^{やや} にわか^{にわか} きぜん^{きぜん}
無^{だんまり}言^{やや}、稍^{にわか}あ^{きぜん}って俄^{にわか}に喟^{きぜん}然^{きぜん}として歎^{きぜん}息^{きぜん}して、

「アア、貴嬢は清浄なものだ潔白なものだ……親より大切なものは真理……アア
潔白なものだ……しかし感情という者は実に妙なものだナ、人を愚^ぐにしたり、人
を泣^{もん}かせたり笑^{もん}わせたり、人をあえだり揉^{もん}だりして玩^{がんろう}弄^{がんろう}する。玩弄されると
薄々気が付きながらそれを制することが出来ない。アア自分ながら……」

ト些^{すこ}し考^{やつき}えて、稍^{やつき}ありて熱^{やつき}気^{やつき}となり、

「ダガ思い切れない……どう有^{すこ}っても思^{やつき}い切^{やつき}れない……お勢さん、貴嬢は御
自分が潔白だからこんな事を言^{すこ}ってもお解^{やつき}りがな^{やつき}いかも知^{やつき}れんが、私には真理
よりか……真理よりか大切な者があります。去年の暮^{まる}から全^{まる}半^{はん}歳^{とし}、その者
の為^ために感情^たを支配^ねせられて、寐^ねても寤^さめても忘^されればこそ、死^{つら}ぬより辛^{つら}い
おもいをしていても、先^{すこ}では毫^{すこ}しも汲^{すこ}んでくれない。寧^{つれ}ろ強^{つれ}顔^{つれ}なくされたな
らば、また思^{すこ}い切^{すこ}りようも有^{すこ}ろうけれども……」

ト些^{すこ}し声^{すこ}をかすませて、

「なまじい力におもうの親友だのといわれて見れば私は……どうも……どう有^{すこ}っても思^{すこ}い……」

「アラ月が……まるで竹の中から出るようですよ、ちょっと御覧なさいヨ」

庭^{いちごう}の一^{うえこ}隅^{ともと}に栽^{なよたけ}込んだ十^{なよたけ}竿^{なよたけ}ばかりの緋^{なよたけ}竹^{なよたけ}の、葉^{なよたけ}を分^{なよたけ}けて出^{なよたけ}る月^{なよたけ}のすずし
さ。月^{なよたけ}夜^{なよたけ}見^{なよたけ}の神^{なよたけ}の力^{なよたけ}の測^{なよたけ}りな^{なよたけ}くて、断^{なよたけ}雲^{なよたけ}一^{なよたけ}片^{なよたけ}の翳^{なよたけ}だもな^{なよたけ}い、蒼^{なよたけ}空^{なよたけ}一^{なよたけ}面^{なよたけ}にてり

わたる清光素色、唯亭々皎々として雫^[5]も滴たるばかり。初は隣家の隔ての竹垣に遮られて庭を半より這初め、中頃は縁側へ上ッて座舗へ這込み、稗蒔^[6]の水に流れては金激濃色「えん」、簷馬の玻璃にとお透りては玉玲瓏^[7]、座賞の人に影を添えて孤燈一穂の光を奪い、終に間の壁へ這上る。涼風一陣吹到る毎に、ませ籬によろばい懸る夕顔の影法師が婆娑として舞い出し、さてわ百合の葉末にすがる露の珠が、忽ち螢と成ッて飛迷う。艸花立樹の風に揉まれる音の颯々とするにつれて、しばしは人の心も騒ぎ立つとも、須臾^[8]にして風が吹罷れば、また四辺蕭然となつて、軒の下艸に集く虫の音のみ独り高く聞える。眼に見る景色はあわれに面白い。とはいえ心に物ある兩人の者の眼には止まらず、唯お勢が口ばかりで

「アア佳こと」

トいつて何故ともなく莞然と笑い、仰向いて月に観惚れる風をする。その半面を文三が窺むが如く眺め遣れば、眼鼻口の美しさは常に異つたこともないが、月の光を受けて些し蒼味を帯んだ瓜実顔にほつれ掛つたいたずら髪、二筋三筋扇頭の微風に戦いで頬の辺を往来するところは、慄然とするほど凄味が有る。暫らく文三がシケジケと眺めているト、やがて凄味のある半面が次第々々に此方へ捻れて……パッチリとした涼しい眼がジロリと動き出して……見とれていた眼とピッタリ出逢う。螺の壺々口に莞然と含んだ微笑を、細根大根に白魚を五本並べたような手が持っていた団扇で隠蔽して、耻かしそうなしこなし。文三の眼は俄に光り出す。

「お勢さん」

ただふるいごえ
但し震声で。

「ハイ」

但し小声で。

「お勢さん、貴嬢もあんまりだ、余り……残酷だ、私がこれ……これ程までに……」

トいいさして文三は顔に手を宛てて黙ッてしまう。意を注めて能く見れば、壁に写つた影法師が、慄然とばかり震えている。今一言……今一言の言葉

の関を、踰えれば先は妹背山、蘆垣の間近き人を恋い初めてより、昼は
 ひねもすよもすがらおもかげのみめさききぬた
 終日夜は終夜、唯その人の面影而已常に眼前にちらついて、砧に
 映る軒の月の、払ってもまた去りかねていながら、人の心を測りかねて、
 すえつむはな^[9]いわせくみず
 末摘花の色にも出さず、岩堰水の音にも立てず、独りクヨクヨ物をお
 もう、胸のうやもや、もだくだを、払うも払わぬも今一言の言葉の綾……今一言
 たったおりからこうしど
 ……僅一言……その一言をまだ言わぬ……折柄ガラガラと表の格子戸の
 あびっくりむつくたちあが
 開く音がする……吃驚して文三はお勢と顔を見合わせる、蹶然と起上る、
 転げるように部屋を駆出る。但しその晩はこれきりの事で別段にお話しなし。

翌朝に至りて^{ふたり}兩人の者は始めて顔を合わせる。文三はお勢よりは気まりを
 悪がって口数をきかず、この夏の事務の鞅^{いそがし}掌さ、暑中休暇も取れぬので
 そうそうしたざしきちゅうじき
 匆々に出勤する。十二時頃に帰宅する。下坐舗で昼食を済して二階
 の居間へ戻り、「アア熱かった」ト風を納れている所へ梯子バタバタでお勢が
 あが
 上って参り、二ツ三ツ英語の不審を質問する。質問してしまえばもはや用の
 はずかたのうずら
 無い筈だが、何かモジモジ^[10]して交野の鶉を極めている。やがて差俯向
 おもちや
 いたままで鉛筆を玩弄にしながら

「アノー昨夕は貴君どうなすったの」
^{ゆうべ}

返答なし。

「何だか私が残酷だって大変^{おこ}憤ッていらしたが、何が残酷ですの」
^{えがおもたのぞあわてあちら}
 ト笑顔を擡げて文三の顔を窺くと、文三は狼狽て彼方を向いてしまい
 「大抵察していながらそんな事を」
 「アラそれでも私にや何だか解りませんものヲ」
 「解らなければ解らないでよう御座んす」
 「オヤ可笑しな」

それから後は文三と差向いになる毎に、お勢は例の事を種にして乙^{おつ}うからん
 だ水向け文句、やいのやいのと責め立てて、終には「仰しやらぬとくすぐりま
 すヨ」とまで迫ったが、石地藏と生れ付たしょうがには、情談のどさくさ紛れに
 のしか
 チョックリチョイといって除ける事の出来ない文三、然らばという口付からま
 ず重くろしく折目正しく居すまって、しかつべらしく思いのたけを言い出だそう
 とすれば、お勢はツイと^{あちら}彼方を向いて「アラ^{とんび}鶉が飛でますヨ」と知らぬ顔の

半兵衛模擬もどき、さればといって手を引けば、またこころ意あり気な色目遣い、トこう
 じらされて文三は些ちとウロが来たが、ともかくも触らば散ろうという下心の
 おのずかおのずか自おのずから素振りに現われるに「ハハア」と気が附て見れば嬉しく難ありがた有かたじく辱
 けなく、罪も報むくいも忘れ果てて命もトントいらぬ顔付。臍へその下を住家として
 魂が何時の間にか有頂天外へ宿替をすれば、静かには坐してもいられず、ウロウ
 ロ座舗まごつを徘徊まごついて、舌を吐たり肩を縮すくめたり思い出し笑いをしたり、又は変
 ぼうらいな手付きを為たりなど、よろずに瘋癲きちがいじみるまで喜びは喜んだが、
 しかしお勢の前ではいつも四角四面に喰いしばって猥褻みだりがましい挙動ふるまいはし
 ない。尤も曾もつとてじゃらくらが高じてどやぐやと成った時、今まで嬉うれしそう
 に笑っていた文三が俄かに両眼を閉じて静まり返えり何と言っても口をきかぬ
 ので、お勢が笑らいながら「そんなに真面目にお成まじめなさるところ成なんからいい」
 とくすぐりに懸ったその手頭を払らい除けて文三が熱気やつきとなり、「アア我々の
 感情はまだ習慣の奴隷だ。お勢さん下へ降りて下さい」といった為めにお勢に憤
 られたこともあったが……しかしお勢も日ふを経るまくたびまに草臥れたか、余りじゃ
 らくらしなくなつて、高笑らいを罷めて静かになつて、この頃では折々物思
 いをするようには成ったが、文三に向つてはともすればぞんざいな言葉遣いをする
 ところを見れば、泣寐入りに寐入ったのでもない光景。

アア偶々たまたま咲懸った恋の蕾つばみも、事情というおもわぬいて沍いてにかじけて、可笑し
 く葛藤もつれた縁えにしの糸のすじりもじった間柄、海へも附かず河へも附かぬ中ぶら
 りん、月下翁むすぶのかみの悪戯たわむれか、それにしても余程風変りな恋の初峯入り。

文三の某省へ奉職したは昨日今日のように思う間に既に二年近くになる。年
 頃節儉の功が現われてこの頃では些すこしは貯金たくわえも出来た事ゆえ、老としよったお
 袋に何時までも一人住ひとりずみの不自由をさせて置くも不孝の沙汰、今年の暮には
 東京へ迎えて一家を成して、そうして……と思う旨さたを半分報知せてやれば母
 親はおおよろこ大悦こころあてび、文三にはお勢という心宛こころあてが出来たことは知らぬが仏のよ
 うな慈悲心から、「早く相応な者を宛あてがって初孫ういまごの顔を見たいとおもうは親
 の私としてもこうなれど、其地そつちへ往つて一軒なすの家を成ようになれば家の大黒
 柱とて無くて叶かなわぬは妻、到底どうせもら貰う事なら親類なにがし某なにの次女お何どののは

うちば おとなし なみ き こ
 内端で温順く器量も十人并で私には至極機に入ッたが、この娘を迎えて
 さい
 妻としては」と写真まで添えての相談に、文三はハット当惑の眉を擧めて、
 ついで しらか さい
 物の序に云々と叔母のお政に話せばこれもまた当惑の躰。初めお勢が退
 いさみ あととり [12] どうせ
 塾して家に帰ッた頃「勇という嗣子」があつて見ればお勢は到底嫁に遣
 めあわ
 らなければならぬが、どうだ文三に配偶せては」と孫兵衛に相談をかけられた
 さよう どつち あや
 事も有ッたが、その頃はお政も左様さネと生返事、何方附かずに綾なして月
 はなは つい
 日を送る内、お勢の甚だ文三に親しむを見てお政も遂にその気になり、当
 よい
 今では孫兵衛が「ああ仲が好のは仕合わせなようなものの、両方とも若い者同
 みは
 志だからそうでもない心得違いが有ッてはならぬから、お前が始終看張ッていな
 ちつ
 くッてはなりませぬぜ」といっても、お政は「ナアニ大丈夫ですよ、また些と
 どうせ おそ
 やそツとの事なら有ッたッて好う御座んさアネ、到底早かれ晩かれ一所にし
 すい
 ようと思つてるところですものヲ」ト、ズツト粹を通し顔でいるところゆえ、今
 はなし きい うち も
 文三の説話を聴て当惑をしたもその筈の事で。「お袋の申通り家を有つよう
 どうていさい むやみ
 になれば到底妻を貰わずに置けますまいが、しかし気心も解らぬ者を無暗
 ことわ
 に貰うのは余りドツトませぬから、この縁談はまず辞ッてやろうかと思ひ
 かわ ようや しき
 ます」ト常に異ッた文三の決心を聞いてお政は漸く眉を開いて切りに
 うなず
 点頭き、「そうともネそうともネ、幾程母親さんの機に入ッたからッて肝腎の
 いくらおつか
 お前さんの機に入らなきア不熟の基だ。しかしよくお話しだッた。実はネお
 つい ち うち
 前さんのお嫁の事に就ちア些イと良人でも考えてる事があるんだから、これ
 うち
 から先き母親さんがどんな事を言ッておよこしても、チョイと私に耳打してから
 返事を出すようにしておくんなさいヨ。いずれ良人でお話し申すだろうが、些イ
 と考えてる事があるんだから……それはそうと母親さんの貰いたいとお言ひの
 はどんなお子だか、チョイとその写真をお見せナ」といわれて文三はさもきまり
 さつき
 の悪るそうに、「エ写真ですか、写真は……私の所には有りません、先刻アノ何
 が……お勢さんが何です……持ッて往ッておしまいなすッた……」

ありさま あて
 トいう光景で、母親も叔父夫婦の者も宛とする所は思い思いながら一様
 く まちわ やさき
 に今年の晩れるを待詫びている矢端、誰れの望みも彼れの望みも一ツにから
 げて背負ッて立つ文三が（話を第一回に戻して）今日思懸けなくも……諭旨免

職となった。さても まわりあわせ 星 むかしかたぎ というものは是非のないもの、トサ昔氣質の人ならば言うところでも有ろうか。

第四回 言うに言われぬ胸の中 うち

さてその日も ようや 漸く暮れるに間もない五時頃に成つても、叔母もお勢も更に帰宅する ようす 光景も見えず、何時まで待つても果てしのない事ゆえ、文三は独り夜食を えんさき 済まして、二階の縁端に はしい 端居しながら、身を ていじ 丁字欄干に寄せかけて暮行く空を眺めている。この時日は既に ばんか 万家の棟に むね 没しても、尚お な 余 なごり 残の影を とど 留めて、西の そめ 半天を とうぼう 薄紅梅に あつさり 染た。顧みて あつさり 東方の あつさり 半天を眺むれば、 あつさり 淡々とあがった ながめつめ 水色、 よいぼし 諦視たら ほじ 宵星の そらあい 一つ二つは かす 鑿り出せ かす そうな かす 空合。幽かに でんずういん 聞える ぼしよう 伝通院の ね 暮鐘の音に ねぐら 誘われて、 ゆうがらす 埒 ^[13]へ ゆうがらす 急ぐ ゆうがらす 夕鴉の ゆうがらす 声が、 あちこち 彼処 あちこち 此処に あちこち 聞えて あちこち 喧ましい。既に あちこち して あちこち 日は あちこち パツタリ あちこち 暮れる、 あちこち 四辺 あちこち は あちこち ほの あちこち 暗くなる。 あおむい 仰向 あおむい て あおむい 瞻る あおむい 蒼空 あおむい には、 あおむい 余 あおむい 残 あおむい の あおむい 色 あおむい も あおむい 何時 あおむい しか あおむい 消 あおむい え あおむい 失 あおむい せて、 あおむい 今 あおむい は あおむい 一 あおむい 面 あおむい の あおむい 青 あおむい 海原 あおむい、 あおむい 星 あおむい さ あおむい え あおむい 所 あおむい 斑 ^[14] あおむい に あおむい 燦 あおむい き あおむい 出 あおむい でて あおむい 殆 あおむい ん あおむい と あおむい 交 あおむい 睫 あおむい を あおむい する あおむい よ あおむい う あおむい な あおむい 真 あおむい 似 あおむい を あおむい し あおむい ている。 あおむい 今 あおむい し あおむい が あおむい た あおむい ま あおむい で あおむい 見 あおむい え あおむい た あおむい 隣 あおむい 家 あおむい の あおむい 前 あおむい 栽 あおむい も、 あおむい 蒼 あおむい 然 あおむい た あおむい る あおむい 夜 あおむい 色 あおむい に あおむい 偷 あおむい ま あおむい れ あおむい て、 あおむい そ あおむい よ あおむい 吹 あおむい く あおむい 小 あおむい 夜 あおむい 嵐 あおむい に あおむい 立 あおむい 樹 あおむい の あおむい 所 あおむい 在 あおむい を あおむい 知 あおむい る あおむい ほ あおむい ど あおむい の あおむい 闇 あおむい さ。 あおむい デ あおむい モ あおむい 土 あおむい 蔵 あおむい の あおむい 白 あおむい 壁 あおむい は あおむい さ あおむい す あおむい が あおむい に あおむい し あおむい ろ あおむい い あおむい 白 あおむい だ あおむい け あおむい に、 あおむい 見 あおむい 透 あおむい か あおむい せ あおむい ば あおむい 見 あおむい 透 あおむい か あおむい さ あおむい れ あおむい る…… あおむい サ あおむい ヅ あおむい と あおむい 軒 あおむい 端 あおむい 近 あおむい く あおむい に あおむい 羽 あおむい 音 あおむい が あおむい す あおむい る、 あおむい ふ あおむい り あおむい か あおむい え あおむい 回 あおむい 首 あおむい ヅ あおむい て あおむい 観 あおむい る…… あおむい 何 あおむい も あおむい 眼 あおむい に あおむい 遮 あおむい る あおむい も あおむい の あおむい と あおむい て あおむい は あおむい な あおむい く、 あおむい 唯 あおむい も あおむい う あおむい 薄 あおむい 闇 あおむい い あおむい 而 あおむい 已 あおむい だ。 あおむい 心 あおむい な あおむい い あおむい 身 あおむい も あおむい 秋 あおむい の あおむい 夕 あおむい 暮 あおむい には あおむい 哀 あおむい を あおむい 知 あおむい る あおむい が あおむい 習 あおむい い、 あおむい 況 あおむい して あおむい 文 あおむい 三 あおむい は あおむい 糸 あおむい 目 あおむい の あおむい 切 あおむい れ あおむい た あおむい や あおむい つ あおむい こ あおむい だ あおむい こ あおむい 奴 あおむい 風 あおむい の あおむい 身 あおむい の あおむい 上 あおむい、 あおむい その あおむい 時 あおむい 々 あおむい の あおむい 風 あおむい 次 あおむい 第 あおむい で あおむい 落 あおむい 着 あおむい 先 あおむい は あおむい 籬 あおむい の あおむい 梅 あおむい か あおむい 物 あおむい 干 あおむい の あおむい 竿 あおむい か、 あおむい 見 あおむい 極 あおむい め あおむい の あおむい 附 あおむい か あおむい ん あおむい と あおむい ころ あおむい が あおむい 浮 あおむい 世 あおむい と あおむい は あおむい 言 あおむい い あおむい な あおむい が あおむい ら、 あおむい 父 あおむい 親 あおむい が あおむい 没 あおむい して あおむい から あおむい 全 あおむい 十 あおむい 年 あおむい、 あおむい 生 あおむい 死 あおむい の あおむい 海 あおむい の あおむい う あおむい や あおむい つ あおむい ら あおむい や あおむい の あおむい 高 あおむい 波 あおむい に あおむい 揺 あおむい ら あおむい れ あおむい 揺 あおむい ら あおむい れ あおむい て あおむい 辛 あおむい じ あおむい て あおむい 泳 あおむい 出 あおむい した あおむい 官 あおむい 海 あおむい も あおむい や あおむい は あおむい り あおむい 波 あおむい 風 あおむい の あおむい 静 あおむい ま あおむい る あおむい 間 あおむい が あおむい な あおむい い あおむい こ あおむい と あおむい ゆ あおむい え、 あおむい どう あおむい せ あおむい 一 あおむい 度 あおむい は あおむい 捨 あおむい 小 あおむい 舟 あおむい の あおむい 寄 あおむい 辺 あおむい な あおむい い あおむい 身 あおむい に あおむい 成 あおむい ろ あおむい う あおむい も あおむい 知 あおむい れ あおむい ぬ あおむい と あおむい 兼 あおむい て あおむい 覚 あおむい 悟 あおむい を あおむい し あおむい て あおむい 見 あおむい て あおむい も、 あおむい 其 あおむい 処 あおむい が あおむい 凡 あおむい 夫 あおむい の あおむい か あおむい な あおむい し あおむい さ あおむい で、 あおむい 危 あおむい に あおむい 慣 あおむい れ あおむい て あおむい 見 あおむい れ あおむい ば あおむい 苦 あおむい に あおむい も あおむい な あおむい ら あおむい ず あおむい 宛 あおむい に あおむい 成 あおむい ら あおむい ぬ あおむい 事 あおむい を あおむい 宛 あおむい に あおむい し あおむい て、 あおむい 文 あおむい 三 あおむい は あおむい 今 あおむい 歳 あおむい の あおむい 暮 あおむい には あおむい お あおむい 袋 あおむい を あおむい 引 あおむい 取 あおむい ヅ あおむい て、 あおむい チ あおむい ト あおむい 老 あおむい 楽 あおむい を あおむい さ あおむい せ あおむい ず あおむい ば あおむい な あおむい る あおむい ま あおむい い、 あおむい 国 あおむい へ あおむい 帰 あおむい え あおむい る あおむい と あおむい 言 あおむい っ あおむい て あおむい も あおむい ま あおむい さ あおむい か あおむい に あおむい 素 あおむい 手 あおむい で あおむい も あおむい 往 あおむい か あおむい れ

まい、親類の所への土産は何にしよう、「ムキ」にしようか品物にしようかと、胸
 はじ そろばん けた
 で弾いた算盤の桁は合いながらも、とかく合いかねるは人の身のつばめ、
 ろせい すい
 今まで見ていた廬生の夢も一炊の間に覚め果てて「アアまた情ない身の上にな
 ったかなア……」

にわか かた
 俄にパッと西の方が明るくなつた。見懸けた夢をそのままに、文三が振
 みや
 返つて視遣る向うは隣家の二階、戸を繰り忘れたものか、まだ障子のままで人
 さ
 影が射している……スルトその人影が見る間にムクムクと膨れ出して、
 よいかげん とこやみ
 好加減の怪物となる……パッと消失せてしまった跡はまた常闇。文三はホ
 つい わがいえ みお ところせ うえなら
 ッと吐息を吐て、顧みて我家の中庭を瞰下ろせば、所狭きまで植駢べ
 くさばなたちき わび な くらやみ うち
 た艸花立樹なぞが、詫し気に啼く虫の音を包んで、黯黒の中からヌッ
 ぬきだ ガラスばり ほかけ
 と半身を提出して、硝子張の障子を漏れる火影を受けているところは、
 やうち うかが こだち も
 家内を覗く曲者かと怪まれる……ザワザワと庭の樹立を揉む夜風の余り
 ぶるぶる たちあが はい
 に顔を吹かれて、文三は慄然と身震をして起揚り、居間へ這入って手探
 ランプ とぼ たてびざ みつめ しばり
 りで洋燈を点し、立膝の上に両手を重ねて、何をともなく目守たまま暫
 ばんやり やかん さゆ ちゃわん くみと
 らくは唯茫然……不図手近かに在った葉鐘の白湯を茶碗に汲取りて、
 ひじ まくら ランプ ほかけ
 一息にグッと飲乾し、肘を枕に横に倒れて、天井に円く映る洋燈の火燈
 にっこ かたほ えみ あい
 を目守めながら、莞爾と片頬に微笑を含んだが、開た口が結ばって前歯が
 いずく うれい あら
 姿を隠すに連れ、何処からともなくまた愁の色が顔に顕われて参つた。

「それはそうとどうしようかしらん、到底言わずには置けん事だから、今夜
 おもいき いや かお
 にも帰つたら、断念して言ッてしまおうかしらん。さぞ叔母が厭な面をす
 る事たろうナア……眼に見えるようだ……しかしそんな事を苦にしていた分に
 らち すこはず
 は埒が明かない、何にもこれが金銭を借りようというではなし、毫しも耻か
 しい事はない、チョッ今夜言ッてしまおう……だが……お勢がいては言い難い
 あれ
 ナ。若しヒョット彼の前で厭味なんぞを言われちゃア困る。これは何んでも居
 なせ いやしく
 ない時を見て言う事だ。いない……時を……見……何故、何故言難い、苟も
 くそ
 男児たる者が零落したのを耻ずるとは何んだ、そんな小胆な、糞ッ今夜言ッて
 もちろんあれ
 しまおう。それは勿論彼娘だつて口へ出してこそ言わないが何んでも来年の
 だしぬけ
 春を楽しみにしているらしいから、今唐突に免職になつたと聞いたら定めて

落胆するだろう。しかし落胆したからと言って心変りをするようなそんな浮薄な
 おんな
 婦人じゃアなし、かつ通常の婦女子と違って教育も有ることだから、大丈夫そ
 んな氣遣いはない。それは決してないが、叔母だて……ハテナ叔母だて。叔母は
 ああいう人だから、^{おれ}我が免職になったと聞たら急にお勢をくれるのが厭になっ
 て、無理に彼娘を^{あれ}他へかたづけまいとも言われぬ。そうなったからと言って
 こっち^{かた}此方は何も確^{いや}い約束がして有るんでないから、否、そうは成りませんとも言わ
 れない……嗚呼つまらんつまらん、幾程^あおもしろくも直してもつまらん。全^{ぜんたい}身何故
^{おれ}我を免職にしたんだろう、^{うぬぼれ}解らんナ、^{おれ}自惚^{おれ}じゃアないが我だつて何も役に
 立たないという方でもなし、また残された者だつて何も別段役に立つという方
 もなし、して見ればやっぱり課長におベツからなかつたからそれで免職にされた
 のかな……実に課長は失敬な奴だ、課長も課長だが残された奴等もまた卑屈極ま
 る。^{わず}僅かの月給の^{どれい}ために腰を折つて、^{まて}奴隷同様な真似をするなんぞつて実に
 卑屈^[15]極まる……しかし……待よ……しかし今まで免官に成つて程なく復職
 した者が^{あした}ないでも無いから、ヒョツとして明日にも召喚状が……イヤ……来な
 い、召喚状なんぞが^{たま}来て耐^{こんだ}るものか、よし来たからと言って今度は^{こつち}此方から
 辞^{かま}してしまう、誰が何と言おうと^{かま}関わらない、断然辞^{かま}してしまう。しかしそれも
 短気かナ、やっぱり召喚状が来たら復職するかナ……馬鹿^め奴、それだから^{おれ}我は
 馬鹿だ、そんな架空な事を宛にして心配するとは何んだ馬鹿奴。それよりかま^{おれ}ず
 差当りエト何んだッけ……そうそう免職の事を叔母に^{はな}咄して……さぞ厭な
 顔をするこつたろうナ……しかし咄さずにも置かれぬから思切つて今夜にも
 叔母に咄して……ダガお勢のいる前では……チョツいる前でも^{かま}関わん、叔母に
 咄して……ダガ若し^{あれ}彼娘のいる前で口汚たなくでも言われたら……チョツ関わ
 ん、お勢に咄して、イヤ……お勢^{おれ}じゃない叔母に咄して……さぞ……厭な顔……
 厭な顔^{はな}を咄して……口……口汚なく^{おれ}咄……して……アア頭が^{おれ}乱れた……」

ト、ブルブルと^{かしら}頭を左右へ打振る。

^{こうぜん}轟然と^{こうしど}駆て来た車の音が、家の前でパツタリ止まる。ガラガラと格子戸が
^あ開く、ガヤガヤと人声がする。ソリヤコソと文三が、まず起直つて突胸^{とむね}をつい
 た。両手^{つえ}を杖^たに起んとしてはまた坐り、坐らんとしてはまた起つ。腰の
 ちょうつがい
 蝶番は満足でも、胸の蝶番が「言つてしまおうか」「言難いナ」と離れ離

れに成っているから、急には起揚られぬ……俄に蹶然^[16]と起揚ッてはしごだん おりぐち すこ ためら 梯子段の下口まで参ッたが、不図立止まり、些し躊躇ッていて、「チョッ言ッてしまおう」とひとりごと あしばや おくざしき 獨言を言いながら、急足に二階を降りて奥坐舗へ立入る。

奥坐舗の長手の火鉢の傍に年配四十恰好の年増、些し瘦肉で色が浅黒いが、小股の切上ッた、垢抜けのした、何処ともでんぼう肌の、萎れてもまだ見所のある花。櫛巻きとかいうものに髪を取上げて、小弁慶^[17]の糸織の袷衣と養老の浴衣とを重ねた奴を素肌に着て、黒縹子と八段の腹合わせの帯をヒッカケに結び、微酔機嫌の脚楊枝でいびつに坐ッていたのはお政で。文三の挨拶するを見て、

「ハイ只今、大層遅かったろうネ」

「全体今日は何方へ」

「今日はネ、須賀町から三筋町へ廻わろうと思ッて家を出たんだアネ。そうするとネ、須賀町へ往ッたらツイ近所に、あれはエート芸人……なんか言ッたッけ、芸人……」

「親睦^[18]会」

「それぞれその親睦会が有るから一所に往こうッてネお浜さんが勧めきるんサ。私は新富座か二丁目ならともかくも、そんな珍木会とか親睦会とかいう者なんぞア七里々けばいだけれども、お勢……ウーイプー……お勢が往たいというもんだから仕様事なしのお交際で往て見たがネ、思ッたよりはサ。私はまた親睦会というから大方演じゅつ会のような種のものかしらとおもつたら、なアにやっぱり品の好い寄席だネ。此度文さんも往ッて御覧な、木戸は五十銭だヨ」

「ハアそうですか、それでは孰れまた」

説話が些し断絶れる。文三は肚の裏に「おなじ言うのならお勢の居ない時だ、チョッ今言ッてしまおう」ト思ッて今將に口を開かんとする……折しも縁側にパタパタと跫音がして、スラリと背後の障子が開く、振り返ッて見れば……お勢で。年は鬼もという十八の娘盛り、瓜実顔で富士額、